通航一覧 十二

内閣文庫
和書 類
三五三八一 號
二六 冊
一七八函 一六架

139
閣

内閣文庫
番號 和 35381
冊數 26 (12)
函號 178 444

周139

通航一覧巻之十二

琉球國部十二

目録

一 来貢 正徳四年

通航一覧巻之十二

琉球國部十二

来貢 正徳四年

正徳四甲午年十二月二日琉球人音樂の時出仕の輩衣服制限の觸あり又御徒道筋警衛のさし紙御徒頭に命せらる

正徳四甲午年十二月二日

日本政府圖書

酒依高家充初布衣以上役人寄合之
明後日琉人音楽ニ付狩衣布衣等召之
不申時登城仕柳之間ニ法印法眼医師同
断

御日記

正徳四年十二月二日

布衣以上
役人
同
寄合

法印法眼医師
明後四日琉球人音楽ニ付御目付狩衣
布衣召候法印法眼も装束ニ而不申時
登城仕柳之間ニ可相詰候

同日大久保佐渡守 掛り御目付ニ差 年寄共春 渡候書付

御徒四組
明後四日琉球人登城ニ付松平薩摩守
差上座敷より大手迄於御礼之時警固

御根下ニ而役御衆筋々儀ニ付鈴木伊兵衛
稲葉多宮 掛りまま候 目付方衆 一而ニ徒御

同月三日明四日送番割

一番 高田忠左衛門組共
松平薩摩守芝屋敷より将監橋
門前増上寺表門迄

二番 菅沼図書組共
増上寺表門前より通町芝口御門内堀
端幸橋御門松平薩摩守上屋敷迄

三番 吉田小左衛門組共
松平薩摩守屋敷前より松平丹後守
屋敷前日比谷御門迄

四番 中山主水組共
日比谷御門より八代洲河岸龍之口
松平紀伊守屋敷前腰掛裏通りより
大手迄

右之通相済申候琉球人明六時薩摩守
芝之屋敷出宅ニ付道番組並共明七半
時揃刻計目上下ニ而西之場詰所江相揃
少依申達候道番之御方右之通御沙汰
御出勤可致成候且退出之節万端も右
之通御達候

一明日本加御供番助御供番組揃刻計目
上下ニ而出勤致候段少依本御番組頭衆ゟ

申渡候

同日

明日琉球人於御城上之間御料理被下候
ニ付手長入申候間出仕候依鈴木伊兵衛
被申聞候ニ付不時非番之順を以右当
申候

御城上之間
手長役

表日向荒助組共

御組並共明六ツ半時揃刻計目上下ニ而

御城ニ而於御座之間中奥ニ而内藤義勝度ニ

以別紙相觸申候

以上御徒方萬年記

同月四日巳中刻大廣間に出御琉球
人の音楽御聴せらるゝ并に松平島津
中将吉貴及ひ両使従者なとに至る
吉貴ヵ家人まても饗應ありて寳永
度の例に准せらる候

正徳四年十二月四日巳中刻大廣間出御
琉球人音楽上覧有之布衣以上之役人法
印法眼之醫師装束ニ而登城

柳営日次記

正徳四年十二月四日

琉球人音楽被仰付次第

一 両使松平薩摩守芝之屋敷より増上寺
表門通丈より通町江出芝口御門前より

御堀端薩摩守幸橋之屋敷際日比谷
御門中よりまつすく通り龍口松平紀伊守
屋敷前腰掛後通大手御門より登城
行列并乃筋警衛等如先日

一 両使并従者共下乗下馬等如先日

一 両使御玄関之階を上り御玄関ゟ入時
大目付出向案内いたし殿上之間下段ニ
着座従者共ハ同所次之間列居下座ハ御玄
関前庭上ニ群居

一 音楽ニ附る出仕之面々ハ狩衣布衣着之

一 百人組之頭御徒頭持之頭御先手
頭目付御規式御用ニ掛り候面々ハ仮六位
狩衣着之

但進物番ハ仮大紋着之

一 松平薩摩守先達而登城殿上之間下段
両使之座上ニ着座

一大廣間下段東之方御襖きはし松之間
第二之柱ゟ如先日御襖立 自段少之方弐枚八 立附並南之方弐
枚八 元掛 二之間より三之間へかけ御譜代衆諸
御奏者番諸衆並何も嫡子共ゟ之外布
衣以上之御役人寄合法印法眼伺公
但表高家并表向より出御礼仕候
交替寄合ハ不出
一御上段より松之間口之間まて御簾掛

巻揚
但御上段之御簾ハ不垂
一両使并楽人殿上之間より大目付案内
御中門之廊下ゟ出ル
但如先日御中門廊下前之衝立を以
構之楽器此所ゟ薩摩守家来運之
柳之間屏風を以仕切楽屋とす
一出御以前ニ薩摩守大廣間下段より罷

目付之方之着座

一 御向之板縁ニ畳数之西使御縁数拝際

伺公楽人者御向之方之列居

一 大広間出御

御先立　松平紀伊守

御太刀　京極刑部大輔

御刀　堀川兵部大輔

按するに松平紀伊守以下御役名等家冊
御役乃条ニ没し次の同朋越前守以下同し

一 御上段　繧繝縁厚畳二畳敷之御大茵御小茵東京錦之縁小菱白綾縁重敷梨子地御刀掛置之

御着座

一 御着座之御後座

同朋越前守

本多中務大輔

御太刀之役

御刀之役

御小性衆

一 御側衆并小納戸衆も小納戸構ニ相詰
一 右中下段西之方下より不残目之上座
とゝく順ニ着座
一 西之方御縁頬ニ奏者之溜詰高家衆詰
衆之四品以上列居
一 若年寄衆も西之御縁頬ニ伺公
一 御奏者番壱人板縁ニ伺公令指図音楽
初

萬年春 自注 楽

嗩吶
横笛
横笛
皷 小銅鑼 彩也
銅鑼 両班 金鑼
三金
三板

安慶田親雲上（アケタハイキン）
喜屋武里之子（キヤム）
祢覇里之子（子ハ）
浜川里之子
伊野波里之子
保栄茂里之子（ホエモ）
久志里之子（クシ）

賀聖明 路次楽

哨吶

横笛

横笛

皷 小銅鑼 新ん

銅鑼 両班 今鑼

三金

三板

安慶田親雲上

喜屋武里之子

祢覇里之子

濱川里之子

伊野波里之子

保栄茂里之子

久志里之子

楽清朝 路次楽

哨吶

横笛

横笛

皷 小銅鑼 新ん

銅鑼 両班 今鑼

三金

三板

安慶田親雲上

喜屋武里之子

祢覇里之子

濱川里之子

伊野波里之子

保栄茂里之子

久志里之子

王者圍 自没 唄曲

百花開 自没 唄曲

管

胡琴

天初曉 自没 清曲

頌皇清 自没 清曲

長線

琵琶

喜屋武里之子

稲嶺（イナミネ）里之子

稲嶺里之子

祢覇里之子

鳳凰吟

嗩吶

横笛

横笛

鼓 小銅鑼 新心

銅鑼 両班 今鑼

三金

三板

安慶田親雲上

喜屋武里之子

祢覇里之子

濱川里之子

伊野波里之子

保栄茂里之子

久志里之子

慶皇都楽 自汲　安慶田親雲上
嗩吶　喜屋武里之子
横笛　祢覇里之子
横笛
皷 小銅鑼 新心　湧川里之子
銅鑼 両班 令鑼　伊野波里之子
為人臣 明曲 自汲
為人子 明曲 自汲

上逢萊 明曲 自汲
管　喜屋武里之子
二線　祢覇里之子
三線　保栄茂里之子
三線　手登根里之子
四線　伊野波里之子
四線　久志里之子
一年終遇 自汲 四季 歌清曲

長線　稽嶽里之子

琵琶　祢覇里之子

琉歌（曲 自作）

三線　保栄茂里之子

三線　稽嶽里之子

一　音楽相済而御上段之御簾中一同御奥
江御入被遊、薩摩守も次江退去、両使
楽人も大目付案内致、上之間ニ而茶之席

小休息

一　薩摩守来而出座、御目見御奏者番披露
中段江罷出、上意之趣紀伊守伝之、座中
江御免合、年而退去、下段御発座際ニ立、御
次御同公之面々一同御目見相済而入御

一　音楽相済ト琉球人時服被下之旨於松之
間薩摩守江紀伊守達之

但時服ハ御暇之節薩摩守宅ニ而

済之、

一 薩摩守ハ帝鑑之間ニ而御料理被下老中
出席及挨拶

饗応奉行　稲葉若狭守

挨拶ハ高家并書
院番頭なり

給仕　但大紋
進物番

一 両使ハ殿上之間ニ而御料理被下
老中出席及挨拶

饗応奉行　井上讃岐守
川勝能登守
松平伊勢守

挨拶ハ高家并讃岐守ハ御書院番頭
能登守伊勢守ハ御小姓組番頭なり

給仕　但大紋
進物番

一 従者ハ柳之間次ニ而御料理被下

饗応奉行　村瀬伊左衛門
石丸石左衛門

能勢三十郎

素袍
小十人組

被下候ハ伊左衛門ハ御目付又九
能勢三十郎ハ小十人頭より

給仕

一 薩摩守家来江も於蘇鉄之間御料理
被下

一 御饗応相済ル大目付指図有之両使退出

一 御玄関階上ニ而先達送出順ニ退出

一 薩摩守退出

一 御小性組御書院番より出人二十人宛御
書院御番所ニ勤番加番共ニ素袍

一 大御番出人七十人大広間口ニ勤番
素袍

一 出仕之面々之装束両使之鴻座迄如先日

一 御城中加番
御玄関東脇
御中之口

御鑓奉行
本多外記

御持
堀筑後守

御臺所口番　　御先手頭　平岡九左衛門
中之御門　　同　永井刑部
臺所前口　　御先手頭　松平権之助
下乗橋渡番所　　百人組　塙田孫右郎

琉球人来朝一件

正徳四年十二月四日

一 敷上之間手長書日内藤助五兵衛勤仕処
同席ニ而出仕御目付衆伺之持衣着用
之事ニ由承ニ而内藤助度持衣着用可
然存旨ニ付森出羽守度ニ　押手候ニ茶年寄衆川手全令　相
伺ニ付受之通之仕る旨作渡ニ付別段
紀伊より返書内藤助度持衣着用之旨
御勤仕
御徒方萬年記

同月同日琉球人御暇乃時出仕ニ付
装束被判限の編ニ付り御之筋

登城及以場掛手長出役乃事を
御徒頭ニ命せらる

正徳四年十二月四日

一明後六日琉人御暇ニ付出仕之面々ハ二日
之通達ル

御日記

正徳四年十二月五日

一明六日琉球人御暇有之ニ付衣布衣着用
諸下法服素襖着用又半時揃之由被
達之

柳営日次記

正徳四年十二月四日森出羽守殿被
渡候御書付

御徒一組

明後六日琉球人ニ登城ニ付御徒有之候間
麻上下着之運ニ相達候

御徒目組

明後六日琉球人登城ニ付如此間警固
仕候面々致候様道筋之儀ハ鈴木伊兵衛
稲葉多宮可承合候以上

同月五日明六日道番割

一番　今田惣八郎組若

松平薩摩守芝屋敷より将監橋外門前
増上寺表門迄

二番　明組　石河吾左衛門当番

増上寺表門前より通町芝口御門迄

三番　江原與兵衛組若

芝口御門より数寄屋橋御門内松野筑
後守御役屋敷後通松平土佐守屋敷迄

四番　江原与兵衛当番　永田源左衛門組

松平土佐守屋敷より本多中務大輔屋
敷前より　抜ケ道ゟ今大久保小路　久世大和守屋敷先切　大屋相模守

座敷前 掛り合之儀ニ付南角
阿部伊勢守座敷先より 松平紀伊守
座敷奥御襖掛裏通大廊下迄
出役之者共御附廻り斗同上下ニ而西之場所江
ニ而相揃候様申達候
一 道番之御方ゟ申入候退出之道筋も先之通
之内ニ而御段候ニ付左様御免可罷成候間鈴
木伊兵衛を以申上候御書付写掛御目候
一 数馬殿ゟ 掛り合ニ付
座数馬より 申入候明日も同席之
面々相談可致候様申候ニ付一昨年相役之
儀大佐渡守殿ゟ相伺候処可致申候趣申
ニ付御渡候付明日ニ而成候支度候様御納戸
頭並ゟ申請候
一 明日奉加御供番御先番組頭御供番組之
通り愛并同上下ニ而例刻出勤候様本
御番其頭並ゟ申渡候
同日

一明六日琉球人ニ被下物有之ニ付而柳之間
方ヨリ手長一組宛出之振時日法々書懸八
郎度ヨリ要出羽守殿法書付を以被仰渡
候ニ付而時并番之順を以相勤申候
柳之間手長　　大屋数馬組并
法組ヨリも助及ひ時分熨斗目上下ニ而御城ヨ
被相勤之振ニ参候
以上法徳方第年記

同月六日己中刻大広間ニ出御法帳
賜物ニ付有之
天英院殿
月光院殿よりも使者ニ物代銀ニ而
正徳四年十一月六日
琉球人御帳之次第
一 琉球国中山王之両使御暇ニ付被仰出
一 両使松平薩摩守芝之屋敷より登城之旨

表門通之より通町ゟ出芝口御門より
数寄屋橋御門松平土佐守御役屋敷後
通松平土佐守本多中務大輔屋敷前
ゟ同土屋相模守屋敷并松平紀伊守屋
鋪前揚屋之裏通大手御門より登城行列
并道筋警護等如先日

一 両使并従者下乗下馬如先日

一 両使御玄関之階を上り御玄関ゟ入時
大目付出迎案内ニて殿上之間下段ニ着
座従者ハ同所次之間列居下段ハ御玄
関前庭上ニ而群居

一 今日御規式之節出仕之面々直垂狩衣布
衣素袍着之

一 百人組之頭御徒奉行御持頭御先手御目
付御規式御用ニ携候面々ハ假ニ六位狩衣
着之

但去御當八朔大役相勤之

一松平薩摩守先達而致登城献上之品不残
両使之席上ニ並置候

一薩摩守献上之品より席を立て松之間御
襖之外ニ伺公

一両使献上之品より大目付案内ニ而中門之
廊ニ並し也
但此中門廊ハ表ゟ衝立を以構之

一御上段より松之間迄之御間御簾捲揚
但御上段之御簾計中一間を巻上

一松之間ゟ老中出席中山王ゟ使者之口上
且進上物仕御喜悦之思召之段両使江述
之下之旨薩摩守ゟ紀伊守達之次ニ中山
王ゟ之進物之儀茂両使謁頂物也又相
達之年而御中門之廊ゟ老中薩摩守
右件ハ列席中山王ゟ御代替ニ付使者

右之者上納仕御暇被　思召之旨其節
王子ヨリ紀伊守ヘ差上之次ニ中山王自分代替
之使者共右上進物仕御暇被　思召之旨
金武王子ヨリ同人ヘ差上之其後両使ゟ御暇
被下物申渡之退出各座を立

一　大廣間出御
　　御先立　　　松平紀伊守
　　御太刀　　　堀川兵部大輔

　　御刀　　　　京極刑部大輔
　御上服　縹紬縁原子西之一通之裂之御大菊御小菊京地
　　　　　綿之縁小菱白綾晩手安緞子地御刀掛置之
　御着座
一　御装束之後着座了
　　　　　　　同　越前守
　　　　　　　本多中務大輔
　　御太刀之役
　　御刀之役

御小性衆

一 御側衆御小納戸衆ハ御納戸構ニ相詰

一 右中下段西之方下ゟ不残同し上座と
して順ニ着座

一 西之方御縁頬之無数之溜詰高家衆詰
衆之四品以上列居

一 并年寄衆ハ西之御縁頬ニ伺公

一 下段東之方御襖きハし松之廊下之
杉戸御襖迄之其内ニ国持大名初表向
四品以上列居

一 御襖之外三之間ゟかけ御譜代衆詰衆
御奏者番表向万石以上詰衆並詰番頭
諸物頭布衣以上之御役人并諸御服
列居

但高家并布衣以下之御役人ハ不罷出

一 薩摩守出席下段御敷居之内ニ而御礼

伝奏共番披露中段ニて主上出両使者
境并献上太刀目録等上意之縁紀伊守
御ニ而先中御兼会并ニ薩摩守以下段東之
方下より不及目見候

一 両使一人宛家来披縁ニ而拝伏伝奏共番
披露之退去夫より大目付案内並ニ柳之
間ニ而献中山王日記直物蒸而被席ニ並
並両使ニ為見之夫より敷上之間ニ退去

家来之席之通迄

一 薩摩守退去して敷上之間家来之席ニ
罷在候

一 次并ニ表向同家来敷上之間之一列ニ御前目
録御目見紀伊守御兼会ト並之退去次ニ
西之方溜諸藩之同家来敷上之一同ニ御前目
録御目見（自此ニ家来出席ニ不及献残有之）御兼会同家来并ニ
退去下段伝換先中闕之伝奏蒸之御

万石以上之面々一同御目見相
済る時御襖障子閉之入御

一 御代替之時中山王ゟ差上物之御目録并
老中より之返翰 白須箱ニ入 披露之者ゟ御奏者
番持参掌翰史披露之次之者中央まて持参
謝恩使者之礼ニ而中山王自分代替ニ付而
差上物之御目録并返翰掌翰史ゟ御奏
者番相渡之次第同断

一 相済る老中披露之者ゟ於縁両使ゟ及
挨拶退る両使謹順持参之物持参頂戴
下る次之者ゟ老中列座候共ゟ之以下
物之儀両使ゟ紀伊守ゟ渡之以下持参
物番持参頂戴両使御礼ニ而之薩摩守
出座御礼述之

一 大目付居間ニ而両使退出大目付案内
階之まて先ニ立る候共順之退出

一 薩摩守退出

一 御小姓組御書院番大御番出人先日如
御礼之時

一 御城中加番
御玄関東張
御中門
御台所口前
中之御門

御持弓頭 梶川与惣兵衛
御持 堀筑後守
御先筒頭 梶四郎兵衛
同 桜井庄之助

台所前口
御先手弓頭 窪田勘右衛門
下乗橋張番所
百人組之頭 新庄帯刀

被下物
公方様より
中山王 白
御代替ニ付而
白銀 五百枚
綿 五百把

金襴　弐拾巻
自分代銀三貫目
白銀　参百枚
羽二重　紅白　百疋
八丈織　参拾端
白銀弐百枚
時服拾
與那城王子ゟ

同断　金武王子ゟ
白銀三百枚　與那城王子従者惣中ゟ
同断　金武王子同断
時服三宛　音楽并勤仕者拾六人ゟ

一位様より　中山王ゟ

御代替ニ付而

白銀　弐百枚

綸子染物　百端

自分代替ニ付而

白銀　弐百枚

大紋羽二重　百端

月光院様より

中山王江

御代替ニ付而

白銀　弐百枚

縮緬染物　五拾端

自分代替ニ付而

白銀　弐百枚

志ほ里染　五拾端

御代始祝儀の書翰老中より返事の紙

使者来りて書翰をとらせそれより帰て候

しく承りぬ王たるこそ　御代始め代替
及ひ其外遠国より出るものを献して御祝儀
をも申しよこすと云々別の御世の名代にて
礼をもつとく王代にあひしらふ事極めて
只今にての御祝或ハ誠をくれより謝す
其国の祝儀御仕合の事也其下る者ハ目
録のごとく使者のかくる事御渡し是ハ其事の
子細ハ薩州より返事御申しきたし免

らるへし

中山王代替書翰の返翰

書翰来到く承りぬ其国代
うけ御王位事を申しよこすをめて
例まて使者代王の物代献して御礼
をも申しよこすと云々誠のこころさしを
もまた御褒美の品云束何そてさしみ賞
せさせ申事御返しく候にへ加りて一段

乃ち仕合ふ存ん候へ下ね目録乃ごとく使
者のうへふよ渡し遣りて此外の事とも安
御よ薩州よりの添来に申し候さる由に
とその也

〻〻琉球人来朝一件

同月九日両使東叡山
御宮に参詣させて
御宮廻りて惣楽を往一組道具物楽器

同六組の楽々吹くにて我をいそくかの行装
御内覧ありて竹橋の門内楽器の後
二組出役を命せられし所觸有りて

正徳四年十二月八日

明九日早天に琉球人上野参詣ニ付松平
薩摩守芝屋敷より相渡橋竹門外堀
上半表門前より内堀端幸橋の門 ヒ入
薩摩守屋敷被書出仕前守屋敷被 抜さ

此ハもと今の丹
羽若狭守屋敷
松平安藝守屋敷前并
備後守屋敷前 此ハもとハ今桜田御門外
松平市正屋敷先なり 井伊備
中守屋敷前半蔵御門より入竹橋御門を出
平川口前より戸田山城守屋敷前左手
際松平右京大夫屋敷前 此ハもとハ山城守
右京大夫屋敷とも
是ハ今一橋殿屋
形構内となる 神田橋を出御用屋敷前昌平
橋を渡り神田明神前本郷を出同三町目
横町通渡光之助屋敷前より天沢寺前

天神切通し下谷池端辺より仁王門を入

同帰道

仁王門より広小路を出小笠原左近将監
屋敷前より本多信濃守前筋違橋御
門を入通町芝屋敷を入所々道筋掃除
入念可数ニ念し手桶ニ水を入出し置可
申候先達る本陣ハ通り町中御休ニ者之
申さし候ニ付る屋敷ハ先見物ニ者不残清在

無之様ニ可仕旨町中可被相觸候以上

大成令補遺

正徳四年十二月八日

明九日上野

御宮江琉球人参詣ニ付御番可有之旨

黒川出羽守殿御書付を以被仰渡候琉

球人松平薩摩守芝屋敷明六ツ時出立

ニ而御目付稲葉多宮ニ達可申聞候

上野

御宮廻り御番　当日内藤義助組共

御組与力同心被召連明六ツ時熨斗目上下

ニ而御役所ゟ可被相越候

一明日竹橋御門ニ而内ゟ右弐組与力出可申旨

大久保佐渡守殿御書付を以被仰渡候

御内ニ而被成ニ付御裏附上下組羽織袴ニ而

可致出勤旨勿論御茶道入不申候右場

所可致引渡旨御目付衆ゟ申聞候ニ付

今日御稽古場之左衛門ゟ申進候　扣すゆかり　此度日傳抄
に寛政八年十二月十二日上覧稽古の節並之上覧所
にありく
御座所脇床之方御透見有之と
見え申候へ共是は御半部也

竹橋御門内ニ而
　　　高田忠右衛門組共
　　　戸田助大夫組共
右御組之ものゟ羽織袴高股立ニ而竹橋
御門之内ニ而相揃候而根申進候
一　内藤助度ゟ申入候明日上覧

御家ゟ中根半十郎依之本多郎右衛門
先様之通布衣并用ヲ成候及又琉球
人並ニて
御家ゟ来諸支より御本防ゟ来候由申候
御家来諸海ゟ早速御番所揚ル候
尚又右様御先御同様尤御開会御揚ヲ成候
　　道番割
一番　　　　　中山之水組共

松平薩摩守芝之屋敷より将監橋際
門前増上寺表門前より源助橋迄
二番　中山主水居跡
菅沼図書組
源助橋より芝口御門前御堀端幸橋
薩摩守屋敷際青山備前守屋敷前
迄
三番
吉田小左衛門組共
青山備前守屋敷裏より松平安芸守
屋敷前永井備後守屋敷前井伊
備中守屋敷前より半蔵御門迄
四番
柴田三左衛門組共
竹橋御門外より平川口御門戸田山城守
屋敷前大手際松平右京大夫屋敷前
神田橋御用屋鋪迄
五番　柴田三左衛門居跡
永田源左衛門組
御用屋敷次より昌平橋神田明神前

本郷三町目迄

六番　　大屋数馬組共

本郷三町目横町より迄菱覚之助屋
敷前天沢寺前より切通し下谷池
之端南頼町仁王門迄

上野より
帰道番割

一番　　大屋数馬組共

上野仁王門より広小路小笠原左近将監
屋敷前より本多信濃守屋敷前筋違
橋迄

二番　　柴田三左衛門跡
永田源左衛門組

筋違橋内より通町通り白銀町大木
迄

三番　　柴田三左衛門組共

白銀町大木より中橋迄

四番　　吉田小左衛門組共

中橋次より芝口御門迄

五番　中山主水病気　菱沼図書組

芝口御門外より増上寺表門迄

六番　中山主水組共

増上寺表門前より同門前町将監橋

薩摩守芝屋敷迄

右之通警固を以　本極ハ御組之々ニ而

慶斗同上下之為明七半時西之場所ニ而

相勤申候

一別段竹橋御門之内座之儀大概警衛之覚

之節之通之由右刻限より早め之御出勤

可被成候

同日大久保佐渡守殿菱川出羽守殿被成

御渡候御書付

明九日琉球人東叡山

御徒二組

御宮ゟ参詣ニ付而竹橋ニ内ゟ鉄炮拾本
伊豆守稲葉多宮ゟ相渡可致勤仕

十二月八日

明九日琉球人東叡山
御宮ゟ参詣ニ付而
御宮固メ勤番可致候

法従ゟ一人組若

法従公経

松平薩摩守芝之屋敷より東叡山迄
道之筋鑓伊豆守ゟ相渡可致候道筋之儀者拾本
伊豆守稲葉多宮ゟ可致承合候

十二月八日

法徳方第年記

正徳四年十二月九日琉球人上野参詣有之

正徳年録

同月十一日両使老中若年寄の宅に

來ル同十二日御三家方え來聘在
毎度町觸有之同十八日作也ニ付
新井筑後守中將吉貴ノ邸にいたる
つとく兩使ニ面ス同廿一日江戸を
發して帰國す

正德元年十二月十日

一明十一日早天ニ御老中方え琉球人來ル
道筋松平薩摩守芝屋敷より將監橋
片門前町筋増上寺表門前より土橋
難波橋と越シ數寄屋橋御門ゟ入

帰道筋

上杉民部大輔屋敷前松平民部大輔裏
門前通あたらし橋ゟ掛り愛宕下筋
増上寺裏門前通町ヘ出増上寺表門
通門前町元ニ道筋芝屋敷ゟ帰ル尤道
筋掃除入念町數ニ應し手桶水を入置し

并下々迄先達而相触候通町中借家之者
立申さゝせ申間敷候若見物ニ不出居
候ハゝ其様ニ可仕候旨町中不残相触候以上

正徳四年十一月

一明十二日早天ニ御三家方江琉球人参候
道筋松平薩摩守芝屋敷より芝新堀
端新通大名町秋田信濃守中屋敷上杉
民部大輔中屋敷前より市谷浄瑠町南部
遠江守屋敷前溜池通赤坂御堀端四ツ谷
御門外御堀端を通市谷田町八幡前より
尾張殿御屋敷江参候夫より御堀端を通り
牛込御門外御堀端船河原橋通水戸殿
御屋敷江参候夫より市谷御門之内大手
通り四ツ谷御門之内より麹町五丁目紀伊
国殿御屋敷江参候夫より松平出羽守
裏門前通り永田馬場より虎之御門

松平大和守表門前天徳寺裏門通り西
久保八幡前より土器町新堀端を弁通
薩摩守屋敷脇なる道筋掃除念を入
町数ニ應し手桶ニ水を入出し置可申候
先達る相觸候通往来ニ差支申すましく候
右屋敷脇と見物ニ出不作法ニ無之様ニ可仕候
此旨町中不相觸候以上
以上大成令補遺

正徳四年琉球使来りし時よろ向ふ画紀
年ともあまたの宮中にありて十二月の十
八日に薩摩守乃許よ行むかふ吉其相居
を對面よ及ふ彼国のものともふたりよ此
時よ八縁塗に水干袴太刀をハ用ひて握刀
よ紅梅乃扇成をもちなり 自沢此扇ハ近衛殿摂政太相国の揚ひしをうつして泥絵
に蝶鳥
を画く
白石私記

正徳四年十二月廿日

覚

明廿一日琉球人御当地出足被成候町中
不作法無之様被致火之元之儀念を入
可申付候見物之者不迫合様ニ名主下知
被致月行事見廻り両木戸様ニ家主
木戸ニ付居不迫合様ニ可致喧嘩
口論無之様可申付候其外兼而度々之御
触候通相守候様町中此旨急度可相触候
以上
十二月廿日
急度為相守可申候以上
十二月廿日
町年寄
三人

正宝事録
正徳五乙未年正月十一日琉球人帰国ニ付
江戸より伏見迄並十三日ニ大坂迄並

同年乙未年十月廿一日去年来府の
両使帰国によりて中山王尚敬より
御礼として使札献物薩摩国
に渡して此日吉光よりこれを納む

渡ハ薩摩国来
貢乃條にあり

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan